

はじめに

介護老人保健施設における看護職員は、入所者様の体調の変化を的確に捉え、必要に応じて医師に報告・相談しながら、経験や知識を活かして適切に対応する力が求められます。入所者様の医療的な安全を守りながら、住み慣れた暮らしに近い生活を支えるという重要な役割を担っています。経験と知識に裏打ちされた観察力や判断力が求められる一方で、入所者様お一人おひとりの「その人らしさ」に寄り添う姿勢も欠かせません。今回は、看護主任として現場をまとめながら日々入所者様と向き合っているN. Kさんにお話を伺いました。内科病棟や精神科病棟での勤務を経て、2007年に札幌へ移り住み、以来13年にわたり当施設で看護職員として勤務されているN. Kさん。その歩みと、看護職としての想いを語っていただきます。

志したきっかけと介護老人保健施設を選んだ理由

N. Kさんが看護職を志したきっかけは、中学生時代の入院経験にあります。「1か月ほど入院し、手術の痛みで動けなかったとき、担当してくれた看護師さんが、とても優しく、常に笑顔で、周囲を明るくしてくれる方でした。動けない私にとって、毎日その笑顔を見ることが支えとなり、長い入院期間を過ごすことができました」と当時を振り返ります。

資格取得後は内科病棟や外来、精神科の急性期・慢性期病棟を経験。「漠然と、病院ではなく施設での看護職を経験してみたいという想いがあり、はじめは介護老人保健施設がどのようなところなのか正直よくわからないまま入職しました」と話します。しかし、実際に勤務し、入所者様との関わりを持つなかで、病院とはまた違う距離の近さを実感。「元々、祖父母が大好きで、高齢者との関わりが好きな私にとっては、とても合っていると感じました」と、施設での看護職の魅力を語ります。前職との違いについては、「病院と違い、日々の入所者様の状態を見ながら、必要に応じて医師に相談し、看護職としての経験や知識を活かして判断することが大切だと感じました」と、施設での看護職ならではの責任の重さにも触れました。

“些細な変化を共有することが、体調の安定と重症化の予防につながる”



“その時に初めて、看護職という仕事に憧れを持ちました”
介護老人保健施設で働く
看護主任の想い



看護主任

N. K さん

1日の業務の流れと多様な役割

入所者様のバイタル測定、処置、入浴時の更衣介助、体調管理、医師への相談・対応、服薬準備・配薬などが主な業務です。それ以外にも、新規入所に向けての面談、入所・退所の対応、受診の付き添いなど、その時々状況に応じてさまざまな業務を担当します。また、夜間には入所者様の状態に応じたバイタル測定や翌朝の状態確認、朝薬の配薬を行うほか、見守りや排せつ介助など、介護職員と協力しながら入所者様の生活を支えています。

「上記の業務内容のほか、意外とパソコン業務も多くあります」と、N. Kさんは日々の業務のなかで時間を割いている記録業務についても教えてくださいました。医師・介護職員・リハビリ職員・管理栄養士など、多職種との連携で心がけていることを尋ねると、「入所者様のことを中心に考え、それぞれの専門性を尊重することを大切にしています」とN. Kさん。「各職種によって、見ているところが違うため、些細な変化を共有することが、入所者様の体調の安定を保ち、重症化の予防につながると思っています」と続けます。

情報共有の工夫については、「必要な情報を、必要な人にできるだけ早く伝えることを意識しています。体調の変化があった場合には、記録に残すだけでなく、直接伝え、協力が必要となった時には早急に対応することができるよう心掛けています」と、申し送りやカンファレンスの場を越えた日常的な連携の姿勢を語ります。

入所様との関わりで大切にしていること

医療的ケアと生活支援の両立について、N. Kさんは「看護職として、医療的な安全を守ることを一番に考えてはいますが、それだけを優先するのではなく、安全を確保しながら、その方の『やりたいこと』や『その人らしい生活』をできる限り実現させてあげられるようにするには、どのように工夫したら良いかも考えるようにしています」と話します。

急変時や体調不良時の対応では、「一旦、冷静になることを念頭に置いて動くようにしています。いつも起こることではないため、急変時や体調不良時は、入所様のことを想っているからこそ、どうしても焦ってしまうものです。そのなかで、冷静に優先順位を考え、周りの職員へ指示したり、自分が行動したりできるように心掛けています」と、落ち着いた対応の重要性を語ります。

入所様やご家族とのコミュニケーションについては、「基本的なことかもしれませんが、『目を見て話す』、『視線を合わせる』ことを意識しています」と、日々の関わりの中で大切にしている姿勢を教えてくださいました。

“「目を見て話す」
「視線を合わせる」
ことを意識しています”



やりがいと困難

看護職として難しいと感じる場面を尋ねると、「病院と違い、専門の科があるわけではないため、一人ひとりの入所様の体調全般を観察し、いち早く変化に気付かなくてはならず、いろいろな病気の可能性を考えなくてはならないことに難しさを感じます。看護職としての経験や知識、観察力が必要であると常に思われています」とN. Kさん。施設での看護職ならではの視野の広さが求められることが伺えます。

困難な場面での職員間の支え合いについては、「立場上、いろいろと判断を迫られることは多いですが、判断に迷ったときや、対応に悩んだときには、一人で抱え込まず、他の職員に相談しています。自分とは違った視点や新しい方法に気付かされます」

求職者へのメッセージ

【介護老人保健施設で看護職員として働く魅力】

「病院のように、治療を目的とし、軽快したら退院するというわけではないため、入所様の生活を支えながら、その人らしく過ごしていくための看護に携われるところに魅力を感じています。日々の生活の関わりの中で、入所様のさまざまな一面を知ることでもあります。退院後、食事量や活動量が徐々に増え、元気を取り戻していく姿を間近で見ることができ、老健で働く大きな魅力を感じています」

【未経験者（転職者等）へのアドバイス】

「多職種と関わりながら、個々の入所様の生活の支えになっていくことができる場所です。病院経験が長い方は特に、はじめは病院との違いに戸惑うこともあるかもしれませんが、何事も一人で抱え込まず、小さなことでも周囲に相談し、いろいろな職種の職員から情報を得ることで、自分自身の視野も広がっていくように思います」

【どのような人が向いているか】

「人と関わるのが好きで、入所様の生活に寄り添うことを大切にできる人。一人で進めるのではなく、周りの職員と協力しながら仕事をするのが好きな人。健康を管理しながら、生活を支えていきたいという気持ちがあれば、施設での経験がなくても、少しずつ経験を積みながら、成長していける職場だと思います」

終わりに——仕事への感謝の気持ち

「私が仕事をするうえで大切にしていることは、その人らしさを大切にすることです」と語るN. Kさん。「日々の関わりの中にある小さな変化や、感謝の気持ちを大切にしながら、入所様も職員もここで過ごせてよかった・働けて良かったと思えるような環境づくりに、少しでも貢献することができればいいと考えています」



“入所様も職員も、
ここで過ごせてよかった・働けてよかった
と思える環境づくりに貢献したい”